

# 明石港の「みなと文化」

橘川 真一

---

## 目 次

第1章 明石港の整備と利用の沿革.....	64-1
1. 古代から栄えた明石の泊り .....	64-1
2. 中世・中継所としての泊り .....	64-2
3. 近世・明石港の築港 .....	64-2
4. 明治・大正時代の明石港 .....	64-4
5. 近代港湾としての明石港 .....	64-5
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	64-7
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ..	64-7
(1) 文芸 .....	64-7
(2) 信仰 .....	64-7
(3) 説話 .....	64-8
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」 .....	64-8
(1) 地誌に見る明石港町 .....	64-8
(2) 浜の御茶屋 .....	64-9
(3) 帆別役所と船番所 .....	64-9
(4) 経ヶ島と中崎 .....	64-10
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	64-10
(1) 港湾利用産業－漁業 .....	64-10
(2) 港湾利用産業－その他 .....	64-13
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」.....	64-14
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	64-17
(1) 宮本武蔵の町割り .....	64-17
(2) 明石港の灯台 .....	64-17
(3) 明石八景と景観 .....	64-17
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	64-19

所在地：兵庫県明石市

港の種類：港湾

港格：地方港湾



【位置図】



【現況写真】

(http://bandmaster.at.webry.info/200805/article\_4.html)

## 第1章 明石港の整備と利用の沿革

### 1. 古代から栄えた明石の泊り

明石の泊り（港）は、古くから交通の要衝として知られたところである。大和王朝（奈良県）と太宰府（福岡県）、出雲国（鳥取県）、吉備国（岡山県）などを結ぶ瀬戸内海の交通路（舟運）や古代山陽道の重要な拠点であった。とくに淡路国（兵庫県）を經由して四国の国々を繋ぐ役割も持っていたほか、難所だった明石海峡の舟泊りとしても活用されるなど、歴史のなかにしばしば登場してくる。

この道を通して、古代の外国の文化、仏教や産業がもたらされ、明石の泊りの繁栄につながったと思われる。畿内（都の範囲）と畿外の境界だったことも、大きな意味を持っていたのである。古代の文学や文献のなかに多く語られているのは、このような理由からである。しかし、古代の明石の泊りが何処にあったのかははっきりしない。奈良時代の『播磨国風土記』（靈龜元年（715 頃））には、古代山陽道の「明石の駅家」、「林の潮（みなと）」が記されており、その位置関係からみて明石川の河口付近にあったのではないかと推測されている。



【写真1 古代の港があったと推測される明石川河口付近】

泊り（港）として機能しはじめたのは、この風土記の記述や『日本書紀』（養老4年（720）の允恭（いんぎょう）天皇の条にある「海人（あま）の男狭磯（おさじ）」（後述）の伝承によって、五世紀以前には港らしきものがあったものと考えられている。『続日本後紀』（貞観11年（869）の仁明（にんみょう）天皇の条には「淡路国石屋浜

与播磨国明石浜、始置船井渡子、以備往還」とある。平安時代前期の承和 12 年（845）に明石浜（港）と石屋浜（淡路市）に、はじめて船と渡し守が置かれ、往還として備えさせたという。

## 2. 中世・中継所としての泊り

中世の明石の泊りは、『源氏物語』（平安時代中期）などの文学に描かれたほか、『平家物語』（仁治元年（1240 以前））などの戦記もの、それに紀行文などに出てくるが、はっきりしたことは分らない。地方豪族の衰退や相次ぐ戦乱のなかで歴史的文献にはほとんど書かれていないからである。古代の明石の駅家は、このころには機能していなかったものと思われ、同時に港としても「淡路との中継所」的なものになっていたものと考えられている。

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。（明石の）入道の領じめたる所どころ、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさかすべき渚の苦屋（中略）秋の田の実を刈り収め残りの齡積むべき稲の倉町ども

（『源氏物語』明石の巻）

須磨（神戸市）から明石の浜（港）に着いた光源氏が見た港の風景である。明石港の風景は、人の往来が多く、入道所有の苦屋や、米倉が立ち並んでいたとある。小説のなかの描写だけに実際の風景ではないが、作者の紫式部が明石ゆかりの人に聞いたか、実際に取材したのかも知れないとの説もあり、このころの港は予想以上にぎわっていたのかも知れない。

中世の明石の泊り付近の絵図としては、正安元年（1299）に時宗の開祖・一遍上人の弟子・聖戒が書いた『一遍上人絵伝』がある。病に侵された上人が明石浦（港）にたどり着いた様子を描いたもので、港そのものの情景は表現されていないが、その横に広がる砂浜、老松、質素な民家など、当時の様子がかいま見られる。鎌倉時代の明石の泊りについてはほとんど分らないが、前述したように港としての機能はほとんどなく、停泊するだけのものだったと思われる。

地元に残る『林崎村郷土誌』（大正 8 年）に、「船上（ふなげ）古波止の浜とも言ふ」とあり、キリシタン大名の高山右近が天正 13 年（1585）に明石の領主になった時、船上に城を築いて港を広げた、と記している。この城は明石城の前身であり、港も明石港の前身で、瀬戸内海の交易と明石海峡の監視のための海城だったものと思われる。豊臣秀吉は、転封のさいに、船 200 艘（大船 2 艘との説も）を高山右近に与えたといわれており、戦略的に重要視された港が存在したことを裏付けている。船上（明石市船上町）は明石川河口の右岸で、現在の明石港とは少し離れている。船上城跡は、本丸跡が残っているだけで、港の跡などは痕跡もない。

## 3. 近世・明石港の築港

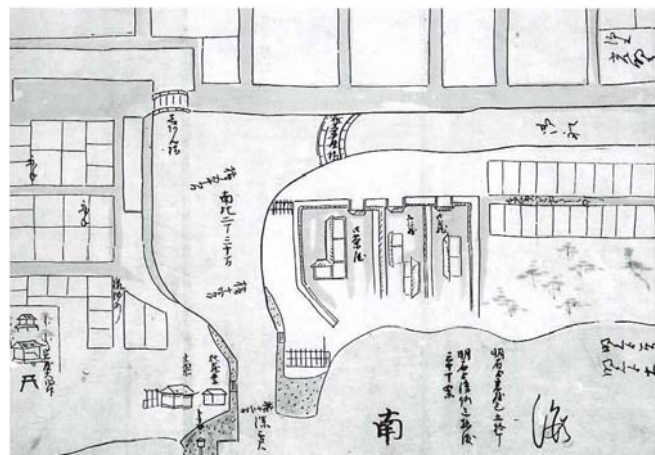
現在の明石港の原形が造られたのは、元和 3 年（1617）に信州松本藩主から明石藩主になった小笠原忠真の手による。関ヶ原の戦いで勝利を収めたとはいえ、徳川幕府の基

盤は盤石ではなかった。二代将軍秀忠は、西国への守りを固めるため、明石城の築城を命じた。忠真は義父の本多忠政（姫路藩主）とともに明石海峡が見通せる人丸山に新城の築城を計画、同6年に完成させた。それとともに海峡の監視や守備のため、同7年に新港の建設に着手した。

明石之船入レ之事、新城ニ被為移、二年目ニ思召立、じねんより、能き船入レに被成候、最前ハ、砂浜ニ而候、明石ハ荒より成るにより、船入レの口へ砂を打込ミ、川口埋ミ候ニ付、毎年三月三日の潮干ニは、右近様（小笠原忠真）、川口へ御出被成、石垣之上ニ畳を御敷かせ御座候被成候而、御家中の侍共、耆人も不残はにかになり、川口より内迄、しよれん（鋤簾）を引、町中より茂、門並に人足を出し、しよれんにて陸へ引揚ケたる砂を、浜ニ運ひ捨させ候、右近様も、三日より五日迄ハ、毎日御出被成候、是より、西国筋、宝の船入と申すに成り

（『清流話』天明2年（1782））

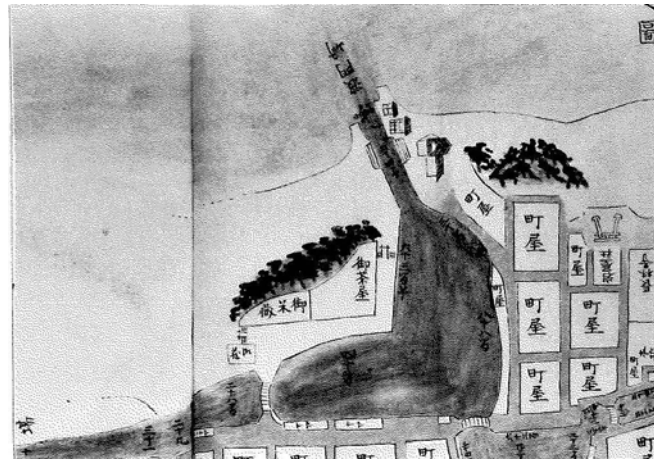
すこし長い引用になったが、明石港のルーツがここにある。築港は大変な工事だったようで、砂浜だったところに石垣を築き、砂を浚らえて港を造っていった。この砂は、南側の砂洲のうえに積み重ねて、防波堤にしたといわれており、現在の中崎公園などである。同8年には、立派な港になったが、内海が荒れると西からの海流に乗って、大量の砂が流れ込んだ。そのため、毎年の三月三日から五日までの干潮の日に、小笠原忠真が先頭に立ち、家中の侍や町中の人たちが総出で鋤簾を引き、砂を引き揚げた。これ以来、明石の港は「宝の船入」といわれるほどにぎわったという。



【図1 江戸時代前期の明石港＝「播州明石城図」】

享保前期（1716～1721）の地誌『明石記』に、当時の明石港を描いた「内川の図」がある。波止崎を入り口とする港は、幅88間～40間（約150m～80m）もあり、東に細長い内港、西にも2カ所の内港を持っていた。港の入り口には番所が置かれ、防波堤として築かれた中崎には、藩主の御茶屋（浜屋敷）、米蔵、御蔵、船揚げ場などがあり、船手組の人たちが住む東御水主町が置かれた。東の内港には船宮（御座船係留所）があり、白鷗丸、光陰丸という大船など14艘もあった。のちには西洋丸、明石丸などの大

船も造られた。



【図2 『明石記』に記された「内川の図」  
(大井高志氏蔵)】

#### 《明石港略年表》

寛永 10 年	(1633)	波止崎の石垣を築く
13 年	(1636)	内川を改修
万治年中	(1658～)	藩主松平信之が港内の堀浚えをした
享保 6 年	(1721)	内川の永代掘りはじまる
元文元年	(1736)	永代掘りに代わって砂船はじまる。砂留役所が置かれる
宝暦 2 年	(1752)	町人らが新波止を築造
天保 19 年	(1839)	波止崎付近の堀浚え

江戸時代の明石港は、内海の監視、淡路への連絡港、荒天のさいの避難港としての役割のほかは、明石藩の専用港であった。他の港のように多くの人たちが利用するような船便も少なく、藩特産品の運搬と魚市場としての漁業基地が活発だった以外は、特筆するような特徴は見られない。地誌『采邑私記』（元禄年間（1688～1703））には、明石藩の特産として、「糯米（もちごめ）、粳米（うるちまい）、酒、醋（す）、棉布のほか、鯛、鱸、章魚（たこ）、干章魚、伊加奈古（いかなご）」などを記している。

#### 4. 明治・大正時代の明石港

明治維新のあと明石港は一般に開放され、定期航路も開設されて活況を呈した。瀬戸内海の基点でもあり、淡路を通じて四国と結ぶ玄関口としても重要な位置を占めた。明治 11 年（1878）に内海で初めての定期連絡船が大阪～岡山間で運航を開始した。大阪商船の備前丸（約 80 トン）だったが、当初は明石には寄港しなかった。港が浅く、汽船が入れなかったからである。それでも、明石の要望によって翌年から、播州航路の寄港地になった。沖合に停船して乗客を伝馬船で運ぶという窮余の策をとったという。このときの大阪から明石までは運賃 8～10 銭、約 4 時間かかった。この航路は、兵庫（神戸市）、高砂（高砂市）、飾磨、網干（姫路市）、室津（たつの市）、坂越（赤穂市）を結

んだ。明石港の一日の乗降客は 150 人ほどだったといわれる。明石と淡路の間は、1 日、2~3 回の便船があり、和船が往復しており、運賃は 5 銭だった。

舟路はすこぶる便利で、日々、大阪その他諸方へ出入する。蒸気船もこのころから通行する。淡路通いの便船は一日に三回ずつある。この淡路と明石との間は、わずかに一里（約 4km）ほどの海峡だが、常に風波あらく、播磨灘の一大難所である。この舟の船頭は、よく熟練していて、大体の風波ならば少しも厭わずに渡航する。

（明治 14 年 2 月 5 日の「朝野新聞」播州明石通信）

地誌『西撰大観』（明治 44 年（1911））によると、このころの明石港は、停泊所が東西 274 間（約 500m）、南北 159 間（約 290m）あり、船舶は、汽船の出港が 540 隻、入港が 541 隻、帆船の出航が 340 隻、入港が 342 隻、和船の出航が 3 万 2,958 隻、入港が 3 万 3,178 隻、輸出は 386 万 5,748 円、輸入は 191 万 1,123 円だった。また、主要特産物は、全国で有数の生産量を誇った清酒が 2 万 3 千石、マッチが 50 万円余、帆木綿が 30 万円余、明石瓦が 10 万円余、陶器が 15 万円余、吠（かます）が 15 万円余、明石鯛、明石蛸など鮮魚類が 40 万円余であった。

大正 10 年（1921）には、兵庫県の指定港になったが、近代港湾としての機能を欠き、とくに港の入り口が狭かったため、避難港としても不備であった。そのため、定期航路や運搬船の入港は頭打ちになり、中核港湾としての発展は望めなかった。



【写真 2 大正時代に活況を呈する明石港】



【写真 3 大正時代、伝馬船で上陸する人々】

## 5. 近代港湾としての明石港

昭和に入って、明石港を拡張改修して新しい港湾として脱皮しようという運動がはじまった。新しい時代に備えた機能を備えようという主旨だった。昭和 4 年（1929）には第 2 種重要港湾の編入を申請、昭和 6 年には市民運動として町を上げての活動になり、港湾拡張期成同盟会が組織された。「明石港、改修拡張ヲ国費補助ノ下ニ速成セラレムコトヲ政府ニ建議スルノ件」が県会に出され、昭和 13 年（1938）から 6 カ年計画、総工費 66 万円の事業がはじまったが、太平洋戦争のために中止された。

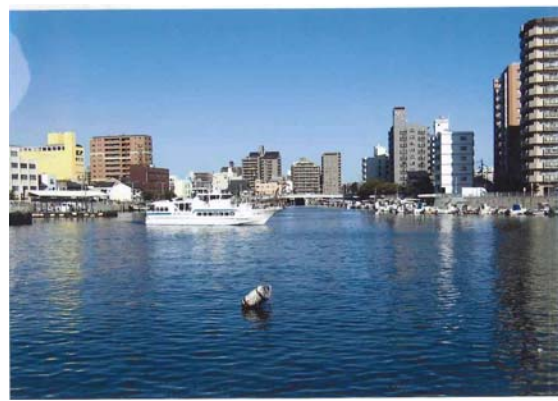
この工事が再開されたのは、終戦直後の昭和 22 年（1947）からで、戦災復興都市計画事業として同 28 年に物揚げ場、泊地が完成した。大きな変革が訪れたのは、本州と

淡路・四国を結ぶルート的重要性が増してきたため、同 29 年に国道 28 号（明石－淡路－徳島）の一部としてフェリーポート（後述）が就航したことである。国道としての利用の高まりとともに、港湾の狭さが問題になり、同 33 年から「港湾特別整備事業」で東西に外港を建設、物揚げ場、防波堤、埠頭用地が建設された。近代港湾として脱皮したのである。昭和 30 年の乗降客約 118 万人だったのが、同 39 年には約 329 万と 3 倍近くにはねあがったといわれる。

このころの明石と淡路間の航路は、フェリーのほかに岩屋、江井、東浦、西浦、郡家の 5 航路が開設されていた。しかし、社会情勢の変化などから昭和 60 年（1985）に、道路としての供用の廃止とフェリー事業の民間委譲が決まり、さらに平成 10 年の明石海峡大橋の完成によって、明石港の利用は激減した。フェリーは「たこフェリー」としてがんばっており、連絡船も 1 社が運航しているが、高速道路の無料化など取り巻く環境は悪くなる一方で、港がかつての繁栄を取り戻すことは難しくなっている。



【写真 4 明石港の全景＝昭和 43 年】



【写真 5 現在の明石港。連絡船・ジェノバラインの出航】

## 第2章 「みなと文化」の要素別概要

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 文芸

##### ①柿本人麻呂と明石の門

古代の交通路は、瀬戸内海の海路が主流であった。陸路よりは早く物が運べることから、大和王朝の官吏たちはほとんどが船を利用した。潮流の激しい明石海峡は最初の難所であり、西風を避ける港としての明石は、知られたところだったと思われる。日本最古の歌集『万葉集』（8世紀後半）にも数多くの明石の歌が残されており、その代表格が柿本人麻呂の羈旅（きりよ）の歌である。「燈火（ともしび）の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」「天離（あまざか）る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ」で、明石大門（明石海峡）を西に向かっていくと大和の国が見えなくなっていくという惜別の歌と、西国からの帰りに明石の門までくるとふるさとの山が見えてきたという喜びの歌である。

『万葉集』には、ほかにも明石の歌がある。「我が船は明石の水門に漕ぎ泊てむ沖辺な離りさ夜更けにけり」で、この船は明石の港に泊めよう、夜が更けてきたから沖へは行かないでくれ、という意味である。この歌は作者は分からないが、水門、つまり明石の泊りが記されており、海峡を航行する船にとっては重要な港であったことが分かる。

##### ②俚謡にうたわれた明石港

明石の俚謡は、大漁唄、手繰り網唄、盆踊唄や明石音頭など様々なものが伝えられているが、明石の風景や漁業のうたが中心で、明石の港に関するものはほとんどない。後述する「茶碗屋の娘」、稲垣足穂が書いた「盆踊唄」のほかに、古調「人丸節」のなかに「若い船頭さんと 明石沖漕げば 浪は高浪身は捨小舟」と、船頭が舟を漕ぐ姿がうたわれている。明石の海岸でのいわし網を引くさいにうたわれた「手繰り網唄」でも、「舟は新どでヤアレ ろは新木でも おさなのぼらぬ この（明石）瀬戸は ないてくれるなヤアレ／出舟の時は からすなくさて きにかかる」—新しい舟で、新しい櫓を押し、明石海峡へ船出のときは、カラスが鳴くのが気にかかる、と船頭たちの気持ちをうたっている。

#### (2) 信仰

##### ①岩屋神社とオシャタカ舟

明石港のすぐ西側にあり、海の神として知られる岩屋神社には、明石と淡路の海上ルートを象徴する祭り「オシャタカ舟」がある。伝承によると成務天皇（神話時代）の13年夏、淡路の石屋（淡路市）から伊弉諾尊、伊弉册尊ら6神を迎えることになり、明石から3艘の舟を出した。西の岸崎まで来たところ、磐楠舟（古代の舟）6艘とめぐりあった。このころ激しい風波になったため、近くの赤石付近で停泊し、翌朝に明石の浦に着いたという。この神々を祭ったのが岩屋神社で、この浜を九艘が浜と呼んだ。この時の名主6人が子孫に伝えるために神事を行ったのが「オシャタカ舟」で、氏子の若者が小さな木舟を「おしゃたか」と叫びながら、海に放り投げて進むという奇祭である。毎

年7月の第3日曜日に行われている。「おしゃたか」は「おじゃったか」（おいでになったか）という明石の方言である。同神社は、延喜式内社の一つで、海上安全・漁業繁栄の神として、明石藩主の信仰も厚く、明石港周辺の鎮守でもある。

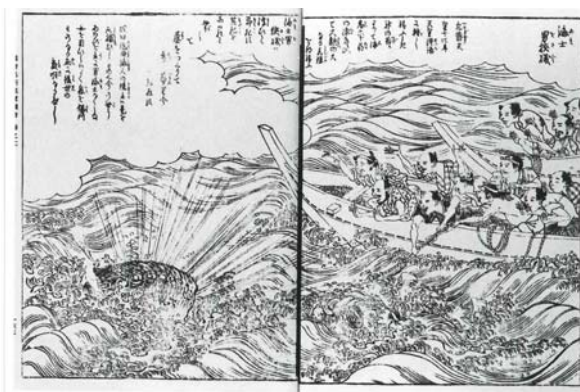


【写真 6・7 海の鎮守・岩屋神社と古式を伝えるオシャタカ舟】

### (3) 説話

#### ①海人の男狭磯の伝承

明石と淡路や阿波（四国・徳島）とをつなぐ伝承に「海人の男狭磯」の物語がある。日本最古の正史といわれる『日本書紀』（養老4年（720））に書かれているもので、允恭天皇（5世紀前期ごろ）の14年、天皇は淡路で狩りをしたが、獲物がたくさんいるのに一頭も獲れなかった。不思議に思って神に占うと「赤石（明石）の海底に真珠があり、それを供えよ」と告げた。天皇は、阿波の海人・男狭磯に海底を探らせたところ、大きな鮑（あわび）が見つかったが、深い海峡だったため、浮かび上がるとともに息絶えた。鮑には桃のような真珠があり、神に捧げると多くの獲物が獲れるようになった。天皇は、男狭磯の死を悲しんで明石川の河口付近に墓を造ったといわれる。この付近にあったといわれる明石の無量光寺には最近、男狭磯の碑が再建された。



【図3 『播磨名所巡覧図絵』にある男狭磯の図】



【写真8 海の交流を示す「男狭磯の碑」＝明石市大観町、無量光寺】

## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### (1) 地誌に見る明石港町

地誌『明石記』には、明石港に関係するものとして、渡海町、船町（237軒、1,088

人)、新浜(90軒、628人)などが記されている。いずれも港に面したところで、船の仕事に従事したものが住んでいた。新浜は漁業の町であった。船数は180石積から45石積まで380艘で、渡海船71艘、茶船54艘、漁船38艘などで、船年寄2人、小頭2人、十艘頭6人、茶船胆煎2人などがいた。また、町中には船大工14軒、浜蔵の仕事に就くものも28人だったとある。江戸時代中ごろの港は、藩の御用が中心で、避難港や淡路との連絡港としての役割は、あまり重きが置かれていなかった。

港内の広さは今も昔も概して変りなく現在面積約一二〇〇〇坪東西三〇四間、南北一五九間、満潮の時なれば百石積位の船にて五百艘位は入港することを得と云ふ。港内には古くより客荷船に渡海組茶船組魚船組あり。渡海組の如きは明石港の開かざる以前林に港のありし時より存し茶船組は松平山城守(忠国・江戸前期の藩主)の命名せられしと伝ふ。此の三組は明治の末頃まで継続せしが40年頃合併し明石組となる。

これは昭和4年(1929)の『明石郷土史』(野田猪左雄)に書かれた明石港で、前年に調査した明石の船は、汽船133艘、帆船68艘、漁船434艘など総計676艘であった。



【写真9 明治時代の明石港の内港。橋は錦江橋】

## (2) 浜の御茶屋

明石港の防波堤として造られた中崎には、明石藩の施設が数多く設けられた。港の入り口付近に作られたのが「浜の御茶屋」である。藩主の浜屋敷だったが、茶室があったので、このように呼ばれた。江戸前期の「播州明石城図」によると、堀に囲まれた屋敷と米蔵が並んでいた。初代の小笠原忠真が建築、六代の松平信之が増築したといわれる。阿波(徳島)の藩主・蜂須賀家が参勤交代の折りに明石に上陸したことがあるが、そのときにはこの御茶屋で休んだと伝えている。

## (3) 帆別役所と船番所

前述したように、明石港は西からの砂の流入に悩まされ続けた。このため、絶えず砂浚えを行って、航路を確保しなければならなかった。明石藩では「帆別役所」を設けて、入港船から帆別金を徴収し、この費用に当てた。明治の記録では帆1反当たり5厘だったという。このような役所は大坂川口、筑前遠賀(福岡)と明石の3カ所しかなかった。

港口には船番所もあった。奉行の下に御船頭、水主組が置かれ、他国に荷物を送る場合は「浦証文」を出した。入港のさいにも品物と品物の数を検査し、不正があれば罰せられた。「打荷物は或る破船と偽り押領致候もの、船頭は獄門」という厳しい御定めで、難破したと偽って横領すると死罪であった。

地誌『明石名勝古事談』（大正9年（1920）、橋本海関）に、内港から御座船が出航するときの面白いしきたりが載っている。出陣式の法螺貝を吹き、安全を祈って64の支度太鼓を打ち、御船歌をうたったという。毎年正月二日の御乗初めでは、37曲の歌が披露された。「やれひ新玉の春のはじめのけふ二日、ツケきみの御乗船初は実にゆゝしく見えにける」—これは「白鷗丸くどき」で、祝ひ揃、御城廻りなどである。番所前では止め太鼓を打つが、伊賀流であったと記されている。

#### （4）経ヶ島と中崎

明石港を開港した小笠原忠真は、大量の砂を掘り取って堤防にしたといわれており、それが現在の中崎だとされている。古くは明石川の下流が東にも流れて、砂地や湿地帯が広がっていたと推測されており、南の洲浜に砂を積上げたものと考えられている。中崎の西端、港の入り口辺りは防波堤が築かれたが、このとき堤防の安全を願って法華経八巻を埋め、法華塔を建てたという。江戸時代にはここを経ヶ島とも経ヶ崎と呼んだ。

中崎は東西に細長く、延長は約1kmにも及ぶ。北側には、内川と呼ばれた内港があり、古くは「流崎（りゅうざき）」ともいわれた。明治維新とともに明石海峡、淡路島という風光明眉なところとして脚光を浴び、高級旅館が立ち並び、海水浴場、中崎公園も開設されるなど、阪神間のリゾート地としてにぎわった。



【写真10 観光地としてにぎわった中崎公園＝大正時代】

### 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

#### （1）港湾利用産業—漁業

##### ①城下町と魚の棚

明石に残されている文書「町割年号記」（織田家文書）には、小笠原時代に「東魚町」「西魚町」があったことが記されており、正月にアカガイ、タラなどを納めたとある。古くから漁業が主要な産業の一つだったものと思われ、他の城下町以上に「魚」に重きを置いた町割（都市計画）が行われたものと考えられる。『明石記』には、東魚町89軒、

西魚町 86 軒、魚屋 56 軒、うち問屋 5 軒、干鰯屋 50 軒とあり、東魚町には鮮魚、西魚町には干鰯屋が軒を連ね、城下の台所の役割を果たしていた。現在、東魚町だったところが「魚の棚」と呼ばれ、阪神間の人々や観光客に「魚の町」として知られている。西魚町だったところは、官庁やオフィスビルに変わって、昔の面影はない。



【写真 11 魚の町づくりの中心になっている魚の棚商店街】

## ②中部幾次郎と明石

魚の町・明石が生んだ先人の一人に中部幾次郎がいる。明治 4 年（1871）に鮮魚仲買の家に生まれた幾次郎は、鮮魚運搬の発動機船を開発、日本の近代漁業の先駆者になった。現代のように冷凍技術が発達していない時代では、魚は新鮮さが勝負であった。発動機船のスピードは革新的な出来事であった。幾次郎は遠洋漁業、さらには南氷洋の捕鯨へと留まるところを知らず、日本漁業を世界の漁業に育てあげた。幾次郎が創った会社は、総合漁業会社「大洋漁業」になり、いまでも大手の総合食品会社として健在である。

## ③司馬遼太郎が描いた魚の町

作家・司馬遼太郎が明石港から淡路に初めて渡ったのは昭和 49 年（1974）のことである。ライフワークの『街道をゆく』の取材のため、魚の棚や明石港連絡船などを詳細に描いた。

「魚ノ棚商店街」という古ぼけた大看板がかかっていた。規模は道路の両側一筋のほんの小さな魚の棚の町で、なるほどどの店も道路に棚やカゴを突き出して、雑多な魚介類を盛りあげている。種類があまりそろわずに雑多なのは冷凍ものでなく、きょう明石海峡でとれたものをならべているためであるらしい。（中略）どのおやじも殺気立っている。魚の鮮度を殺気立ちで表現しているわけで、ずっと見てゆくと、タチウオ、ベラ、ハモ、タコ、カレイ、シャコといったものがならべられていた。

（『街道をゆく・明石海峡と淡路みち』）

司馬遼太郎の魚の棚である。明石鯛、明石だこが有名だが、明石海峡を中心に潮流が激しいせいか、日本でもっとも魚がうまいということになっていると書いている。大坂にもかつて魚ノ棚があり、軒下に大きな板を傾けて置き、その上に魚を並べたのでこの名が付いたというのである。

播淡汽船といえ、その名称が明治調であるところから（中略）煤煙でよごれた黒い船体、長い煙突、そしてその煙突の下では火夫が石炭をひっきりなしにほうりこんで汽罐の温度をあげているといった蒸気船を想像していた。しかし現実に横づけになっている船はディーゼル機関で、煙突は実用としては要らず、しゃれたデザインの装飾物になっている。

（『街道をゆく・明石海峡と淡路みち』）

司馬遼太郎が乗船したときは風が強かった。海から見た明石港は生簀のように小さく、港内に大きな洲があり、洲の上に人家が密集していたという。この洲は中崎のことであろう。35年前の明石港の姿である。



【写真 12 大正のころの連絡船乗り場】

#### ④明石港の朝市

明治 36 年（1903）の『明石舞子の古今誌』に面白い広告が掲載されている。「明石港内 生魚定市場 当市場取扱ノ魚類ハ西京大坂其他各地ニ於テ雷ノ轟キタル如ク名声赫々ノ賞誉ヲ荷ヘリ」とあり、魚問屋有庄や魚屋トヒ屋、あわじやが市場主であった。藩政時代から港に魚市場があったものと思われ、淡路、備前（岡山）、阿波（徳島）、讃岐（香川）などの魚が取り引きされた。明治には「明石の魚」として京阪へ汽車便で送られて名を上げたといわれ、1年の取り引きは 10 万円に達した。明石の魚は、一般的に“前もの”といわれ、新鮮さが売り物であったが、この伝統は見事に現在まで受け継がれている。



【写真 13 明石港にある「明石市地方卸売市場水産物分場」】

港の魚市場も「明石市地方卸売市場水産物分場」として健在である。

#### ⑤ 県立水産試験場

兵庫県は、明石を瀬戸内海の水産の拠点とするため、大正 14 年（1925）、明石市船町（現在の材木町）に「兵庫県水産試験場」を開設した。伝統漁法を続けていた内海漁業を、のりなどの養殖など近代漁法への転換を指導した。菊水丸など 3 隻の試験船を持って内海、近海の試験調査や海洋調査を行い、漁業に大きな影響を与えた。昭和 20 年（1945）の空襲で焼けたが、同 23 年には新庁舎が完成、県と明石市共催の水産博覧会が開かれた。同 25 年には中崎に水族生態研究所も設けた。

#### ⑥ 明石市立水族館

明石の魚を知ってもらおうと昭和 32 年（1957）に「明石市立水族館」が中崎海岸に開館した。全国の水族館ブームに乗ったことと、前項の水族生態研究所の建物、設備を引き継いだものであった。翌年には全面改装し、アカウミガメ、ペンギンなどに人気が集まったが、規模が小さいこともあって同 47 年に閉館した。

### （2）港湾利用産業－その他

#### ① 模造珊瑚で好評だった「明石玉」

沿革の項で記したように、明石の特産物は数多いが、なかでも明石から発信したものの代表格に「明石玉」がある。天保の頃（1830～43）、明石に滞在していた江戸の鼈甲細工師・江戸屋岩吉は、寒さの厳しい夜、知人に招かれた。土産にもらった卵を袂に入れていたところ、白身が寒さで固まるのにヒントを得て、模造珊瑚を発明した。これが「明石玉」と呼ばれ、安価な装飾品として全国に出荷される人気になった。

「明石玉」は丸くした柘の木を芯にして鉛玉で重さを持たせ、表面を白身で固め、牛の爪などを張り付けて彩色したものである。珊瑚の代用品として簞の飾り、掛け軸の風鎮などに人気があった。明石藩も特産品として援助しており、明治 8 年（1875）の『日本産物誌』にも紹介された。家内工業として広がり、明治 20 年（1887）の記録では、11 軒で約 53 万 7 千個を製造、中国にも喫煙具、念珠などが輸出されたといわれる。35 年には意匠登録され専売特許を受けている。しかし、セルロイドなどの出現で大正中ごろには衰えたが、この製造過程で生まれた「玉子焼き」は、現在も明石の味として全国に知られている。

これ以外にも、江戸時代に明石藩内で発明された「明石縮」は、福岡や小千谷（新潟）に広がり、その地の特産として名をあげた。港を中心とした交流の拠点であったことが、さまざまな技術を伝えていったものと思われる。

#### ② 廃物利用だった「玉子焼き」

前項でも紹介したが、「明石玉」が人気を集めるとともに、卵の黄身が大量に余るようになった。当時はまだ卵は貴重品で、黄身の利用がさまざま考えられたという。この廃物利用が「玉子焼き」になったという伝承は、明石でこんな味が生まれたことから考えると、一概に否定はできない。土地の言い伝えでは、明石藩の馬駆け場で“いと万”

こと伊藤万太郎という人が屋台で焼いていたというのが最初で、子供を対象としたものであったという。昭和 38 年頃の「文藝春秋」で、樽屋町に住んでいた向井という人が大正の初めごろ屋台を引いていたことが紹介されており、このころから祭礼などの人気ものだったようである。蛸を入れた現在の形になったのは戦後のことで、今では全国区の明石の味になった。

### ③横山福蔵と国道フェリー

明石港が他の港と決定的に違うところは、国道 28 号の一翼として発展してきたことである。文字通り四国への流通の玄関口として機能してきたのである。明石・淡路間の定期連絡船は、明治 21 年（1888）に日吉丸が 1 日 5 往復したことはじまる。明石港の航路の確保に奔走した船町（現在の材木町）の横山福蔵は、「明石港横山海陸運送店」を設立、岩屋航路、洲本までの東浦航路、鳥飼までの西浦航路を開設した。同 40 年ごろには、旅客が毎日約 500 人に達し、貨物も激増したのである。このため、明石・岩屋間は県道や国道に準じる扱いにするようにという意見書が兵庫県会に出され、さらに大正 7 年に明石・岩屋間は国営の海上連絡にするよう要望が出された。

これらの運動が現実味を帯びたのは、戦後に本州と淡路・四国の交通が切実な問題になってきてからである。昭和 24 年（1949）に「阪神四国道路開発協議会」が結成されて、フェリーボートによる連絡路の実現のスタートを切った。同 26 年には「阪神四国連絡期成同盟」が発足、翌年の道路整備特別措置法によって認められた。明石フェリーが開通したのは同 29 年 4 月で、「あさぎり丸」が華やかに出航した。同 40 年代のピークには、一日 42 往復、年間約 50 万台の車を運ぶなど、国道としての役割を果たした。しかし、同 61 年には道路としての供用が廃止され、フェリーも民間に移譲された。さらに、平成 10 年 3 月には明石海峡大橋が開通、同 21 年からの通行料金千円、新政府による高速道路無料化の動きなど、取り巻く環境は厳しさを増している。



【写真 14 開通した明石フェリー＝昭和 29 年 4 月】



【写真 15 現在の「たこフェリー」、存続に様々なイベントを続ける】

## 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

明石は古代から知られたところであった。冒頭でも触れているが、交通の要衝であつ

たこと、都から地方へ行く玄関口であったこと、豊かで美しいところだったからである。都の文人たちや地方官、神官、僧侶らがしばしば訪れており、文芸のなかに残した。他の地方よりはるかに多くのものが現在に伝えられており、そのなかには明石が港であったことを推測されるものもある。

### ①播磨国風土記

最古の地誌『播磨国風土記』（和銅6年～霊亀元年（713～715））の逸文に「明石の駅家 速鳥」の話が記されている。明石の駅家の近くにあった駒手の御井からはきれいな清水が湧いていた。仁徳天皇（古代の天皇）のころ、井戸のそばにあった大きな桶を切って舟を作ったところ、七つの波を越えるほど早かったという。この舟を「速鳥」と名付けて、毎日、天皇のもとに清水を運んだが、あるとき、天皇の食事に間に合わなかったので、歌を詠んで運ぶのをやめた、というのである。ここから読み取れるのは、明石に駅家があり、舟も持っていたということで、港らしきものもあったと推測される。

### ②日本書紀

『日本書紀』にも億計（仁賢天皇）・弘計（顕宗天皇）の物語がある。王朝の権力争いで父を殺された二人の王子は、縮見屯倉（三木市）に隠れ住んだが、ある夜、新築祝いの席で身分をあかし、返り咲いたというものである。時の天皇・清寧天皇は、二王子を「赤石（明石）に至りて迎え奉らしむ」とある。伝承の世界ではあるが、「赤石の浦」つまり明石の港に迎えを出したとも考えられる。

### ③今昔物語集

明石の代表的な歌に「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」（『古今和歌集』（平安時代の勅撰和歌集所収））があり、長い間、柿本人麻呂の歌として信じられてきたが、『今昔物語集』（12世紀前半）には歌人の小野篁（おののたかむら）の作だと記されており、現在では、これがほぼ定説になっている。この物語集では、篁が隠岐に流される時、舟で出立し、「明石ト云所ニ行テ、其ノ夜宿テ」詠んで涙を流した、と書かれている。明石の港に一泊したのである。

この物語集には、もう一つ陰陽師の話がある。多くの荷物を積んで京へ向かっていた船が明石の沖で海賊に襲われ、悉く奪われた。船主らが明石の浦で泣いていると、陰陽師の智徳法師が通りがかり、呪文によって取り戻したという。明石の沖には海賊が横行していたことは、多くの文献が伝えており、難を逃れて明石の港に避難した船も多かったようである。

### ④平家物語

軍記物の『平家物語』（仁治元年（1240以前））にも、月の名所としての明石が何度か登場する。寿永5年（1184）の一の谷の戦い（神戸市須磨区）で源義経の奇襲作戦に敗れた平家は、壇の浦で滅亡する。多くの平家の高官が捕虜になり、義経は全員を引き連れて明石の浦に一泊する。翌元暦2年4月14日のことである。「名をえたる浦なればふけゆくまに月さえのぼり」—有名な明石の浦だから、夜が更けるとともに月が冴え

渡って、女房たちは忍び泣いたとある。鎌倉時代の明石は、西国から帰路に着く人たちにとっては、最後の船泊りのところであった。

### ⑤松尾芭蕉

江戸時代の俳人・松尾芭蕉（1644～1694）の紀行文に『笈の小文』があり、明石で詠んだ句「蛸壺やはかなき夢を夏の月」は名句として知られている。夏の月が照り輝く明石の海のなかで、明日の運命も知らずに、蛸は壺のなかではかない夢を見ているのだろうか、という人生のはかなさをうたったものである。『笈の小文』は貞享4年（1687）から翌年にかけて関西を旅したときに書かれたもので、明石に入ったのは同5年4月20日のことである。船旅だったようで、この句の題に「明石夜泊」とあるところから、明石に泊まったのではないかといわれてきたが、知人への手紙に須磨で泊まったと記されているところから、明石の海を見るために訪れたものと思われる。

### ⑥茶碗屋の娘

明石で古からうたわれてきた民謡に「茶碗屋の娘」というのがある。俚謡だったものに芝居がかった筋立てが付いたもので、庶民の催しなどで演じられたという。

ここは播州明石の町よ 町の繁華はたるやの町よ 茶碗屋問屋で明石屋ゆうて  
娘お糸はつぼみの盛り 年は二八できりょうが一よ あいきよ良ければ皆人さんが  
小町娘と其の名が高い (『明石市史・下巻』所収)

美しい娘お糸に殿さんが横恋慕したことから悲劇がはじまり、無理矢理お城に連れていかれる。涙ながらお糸はその夜、お城を抜け出し、家に帰るが両親も行方知れず、途方に暮れたお糸は、古波止から身投げをしたという。「きりょうがたたって このありさまは ありし昔の物語」で締めくくられている。明石の港の悲しい物語である。

### ⑦稲垣足穂

明石が生んだ異色の作家・稲垣足穂（1900～1977）の作品に『新風土記叢書・明石』（昭和23年（1948））がある。赤い石、明石城などの思い出を詳細に記しているが、このなかに面白いうたが載せられている。

明石の殿さん大きいこと願た  
岩屋が瀬戸へ ハア橋かきよと

明石城の築城とともに、城下町や港づくりがはじまったが、港の浚渫は大変な工事であった。砂を中崎にどんどん積上げているのを見た庶民たちは、明石海峡にまるで橋を架けるように感じたのであろう。このよううたを残した。江戸時代の盆踊りでうたわれたという。「(港づくりは)埋め立て工事も云える。いずれにせよ大英断だった」と足穂は記している。「橋でもあったらな」というのが、明石や淡路の人たちの夢だったと思われるが、平成10年に明石海峡大橋として夢が実現するとは、だれも想像すらして

いなかったらう。

## 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

### (1) 宮本武蔵の町割り

劍豪・宮本武蔵が明石の町割り（都市計画）をしたことは、意外に知られていない。前述（第1章3項参照）したように、小笠原忠真は元和5年（1619）から城下町の工事にも着手した。このとき兵法者として知られていた宮本武蔵に協力を頼んだものと考えられている。小笠原家に伝わる『小笠原忠真一代覚書』には「御樹木御茶屋宮本武蔵に被仰付候」とあり、地誌『明石記』にも「宮本武蔵ト云士町割有之ト云」とある。地誌などを総合すると、東西1,274間（約2.3km）、丁数21丁余だったと推定される。明石の縄張りのなかで、港は重要な位置を占めており、兵法のうえからも武蔵が何らかの助言をした可能性は捨て切れない。残念ながら確たる資料はない。

### (2) 明石港の灯台

明石港の入り口に古い石積みの灯台が残されている。近畿地方では最古の灯台ではないかといわれ、現在、周辺整備が進められている。この灯台の歴史ははっきりしないが、元禄のはじめ（17世紀末）の地誌『采邑私記』に、明石藩主・松平光重（在任1634～1639）が港を浚渫、その砂を積上げて堤防を築いて波止崎と呼び、「識往来出入之船又有常燈室」と記されている。出入りする船が識別しやすいように灯台をつくったというのである。このころの「明石城図」には、灯籠の絵が描かれており、木造の灯台があったものと推測されている。現存する石積みの灯台が何時ごろ作られたのかは分からないが、藩政時代にあったことは間違いない。



【写真16 明治時代の明石港の波止崎灯台】

### (3) 明石八景と景観

明石は古代から風光明眉なところとして知られ、多くの人たちが訪れた。地誌『采邑私記』には、海辺の眺望は描くことが難しいほどで、扶桑（日本）の絶景であると絶賛している。さらに松平信之（在任1659～1679）は儒学者・林春斎（林羅山の子）に命じて「赤石八景」を作ったとある。このなかに「赤石浦月」があり、明石の浦に舟を浮かべて見た月の美しさを讃えている。春斎の子・春常ものに「赤石八景」を詠んでいる。

千舟百舟真帆片帆。のどけく響く歌唄や。おのづと合はず櫓拍子に。今日のつとめを果してし。海の人々おのがじし。かへるとさしも波止崎の。燈台に火はともされて。夜のとばりは下されぬ。

（長井静泉作歌・『明石郷土史』所収）

これは昭和のはじめに作られた郷土歌「明石八景」の一節である。「八景」は現代まで受け継がれて、さまざまところで親しまれているのである。



【写真 17 古代からうたわれた明石の景観。大正時代の中崎海岸】

### 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

明石の港の文化や歴史遺産は、太平洋戦争の戦災、阪神・淡路大震災という二つの災害と、高度経済成長期の開発などによって、かつての原形をとどめないほど変貌した。港の周辺にあった古い町屋や商家も、一軒も残っていない。古くから親しまれた景観としての明石の海は、明石海峡大橋が完成した現在も、昔の風情を保っているが、歴史的に大きな意味を持つ「明石の港」に対する取り組みが行政も、市民も遅れているのは否めない。

「みなと文化」に関するもので残されているのは、前述した岩屋神社のオシャタカ舟、明石港の旧灯台、それに魚の町・魚の棚ぐらいのものである。もう少し歴史面からとらえた「みなと学」といった市民運動が起きれば、と思う。明石は、明石城、子午線の町、明石海峡大橋など注目されるものが多い。「みなと」のことは、どちらかという二次的なものになっているといえる。

第1章でも述べたように、社会が激変し、港の存在そのものが危機にたっている。主要交通路であった連絡船もフェリーも、大変な状況になっている。フェリーは「たこフェリー」として、いろんなイベントを組んでがんばっているが、先行きは明るくない。明石市は第4次長期総合計画で「海峡のまち、魚のまち」として観光開発に取り組み、海峡のクルージングなどを推進している。しかし、そこにはかつての「みなと文化」を振興するアイデアは盛り込まれていない。